

自分として生きることを
みんなで考える会

— 森のそばで暮らす中で見えてきた世界 —

Event Report
2020.2.16 SUN

はじめに

労働金庫連合会は創立50周年記念社会貢献活動として、NPO法人ホールアース研究所と協働し、2005年に「ろうきん森の学校」を開校しました。

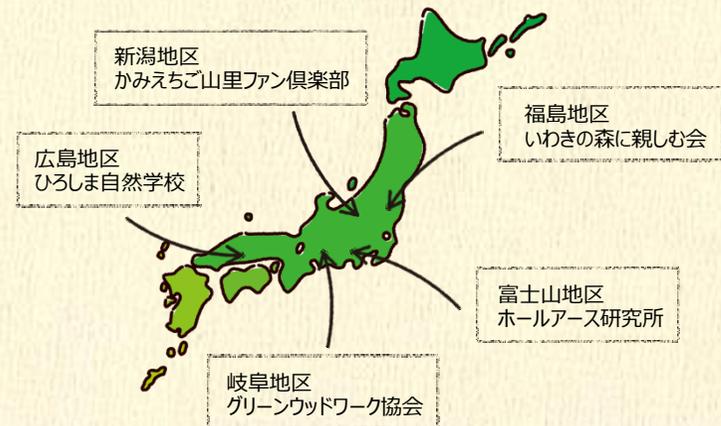
そして、2020年2月16日に、開校15周年記念イベントとして、「自分として生きることをみんなで考える会ー森のそばで暮らす中で見えてきた世界ー」を開催しました。

伝えきれない部分もあるかと思いますが、このレポートを読んでもらった皆さまの暮らし方や働き方を考えるような機会や、「ろうきん森の学校」の次なるステップに繋がればと考えています。

ろうきん森の学校とは？

「ろうきん森の学校」は、日本の里山再生をテーマに、2005年より、労働金庫連合会が活動資金を支援し、NPO法人ホールアース研究所を主管団体として実施している環境教育事業です。福島・富士山・広島の3地区を舞台に、①森を育む②人を育む③森で遊ぶの3点を活動の柱として位置づけ、現地のNPOが軸となり、地域の方々と共に様々な取り組みを展開してきました。

2015年度より、向こう10年間で「第Ⅱ期」と位置づけ、新潟・岐阜地区の新たな2地区を加えた合計5地区で、「森づくり」から始まる「人づくり・地域づくり」に繋げる環境教育を、さらに発展させることを目的として、事業を継続しています。荒廃した森林の再生や地域で活動するNPOとの協働、人々の健康維持と安らぎに欠かすことのできない森林とのふれあい活動などに取り組んでいます。



イベントの狙い

イベントタイトルは「自分として生きることをみんなで考える会－森のそばで暮らす中で見えてきた世界－」。多様な働き方やパートナーシップの組み方、暮らし方が選択できる昨今、溢れるような選択肢と情報が、逆に生きづらさに繋がっていると感じられます。そんな生きづらさの解決に、「森のそばでの暮らし」が実はヒントを持っているのでは？と思い、今回のイベントを企画しました。森のそばで、自分の感性をそのまま言葉で表現したり、心から大好きな自然とのふれあいを誰かに提供したり、誰にも知られないような手仕事を黙々と進めたり、地域の方々と肩書抜きで接したり。定義は人それぞれかと思いますが、そんな「自分として生きること」を実現する手段の一つに、「森のそばでの暮らし」があるのではないかと、実体験として感じています。

自分自身の暮らし方や働き方、生き方に、疑問や“もっとよくできるんじゃないか”という思いを持った方々と、「森のそばでの暮らし」をキーワードとして、みんなで考える場をつくりたいと思い、今回のイベントを企画・実施しました。また、そんな方々との繋がりが、「ろうきん森の学校」の今後の活動に向けた新たな一歩に繋がるのではないかと期待しています。



イベント概要

- *日時 : 2020年2月16日 (日) 13:00-16:30
- *会場 : アーツ千代田3331 コミュニティスペース
- *参加者 : 41名
- *スケジュール : 13:30-13:40 オリエンテーション、チェックイン
13:40-14:40 ゲストによるトーク&セッション
15:00-16:15 ゲスト・参加者による円卓ディスカッション
16:15-16:30 おわりの挨拶、今後のアナウンス
17:30-19:30 森の恵みを楽しむ交流会 (参加自由)
- *ゲスト : ・信岡 良亮 氏

大学卒業後、Webディレクターとして働きながら、経済成長の先に幸せがあるイメージが湧かなくなり、2007年に退社。隠岐諸島海士町あまちょうが掲げる「ないものはない」というスローガンに共感し、「ないものは自分たちで作ろう」という意志に基づいて、人口2400人弱の島に移住。株式会社風と土とを仲間と共に起業。6年半の島生活後、東京に拠点を移し、2015年に株式会社アスノトを創業。さとのば大学発起人。

・井東 敬子 氏

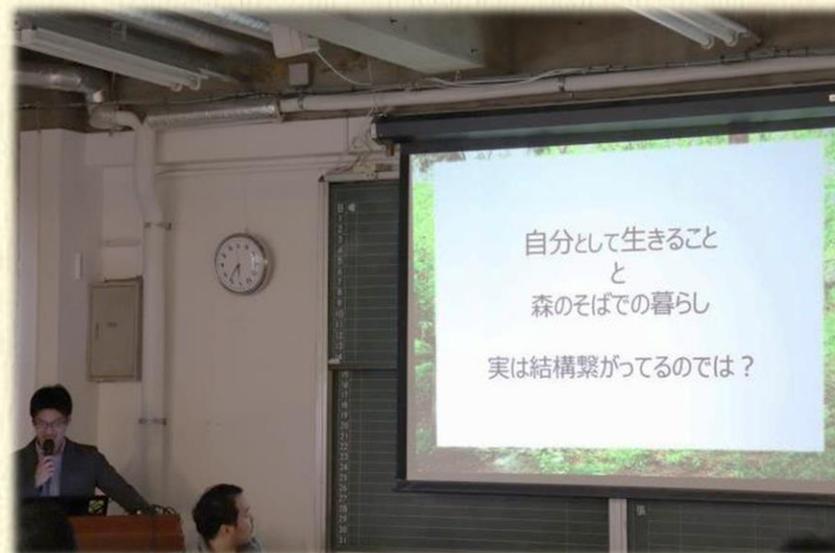
旅行会社・国際協力NGO、ホールアース自然学校職員を経て、2006年にリードクライム株式会社を起業。2011年、山形県鶴岡市に移住。2015年に鶴岡ナリワイプロジェクト設立。好きなことで誰かの役に立つ”小さなソーシャルビジネス”ナリワイ起業を普及している。「ナリワイの全国ネットワーク」づくりに取り組む。



「ろうきん森の学校」って？今日はどんなイベント？

当日はあいにくの雨にも関わらず、総勢41名、20代～60代まで、遠くは北海道からお越しいただいた方もおられるくらい、幅広い層の方々にお集まりいただきました。スクール形式でスタートしたからか、少し緊張気味の空気が漂う会場でしたが、まずは「ろうきん森の学校とは？」を皆さんにお伝えしました。その後、まずは運営側の目的と趣旨を共有するべく、イベントの実施経緯や、スケジュール等を説明しました。

いよいよ、イベントのスタートです。



まずは率直な気持ちを交換。

運営側の想いや狙いを伝えた後は、参加者の方々の声も少し確認。
イエスは赤、ノーは青のカードを上げてもらい、簡単アンケートをとりました。
「ろうきん森の学校、という名前を聞いたことがある」→青多め。
「この中に知っている人がいる」→赤と青半々くらい。
「実は交流会の食事を目当てに来た」→運営側は赤多め。(笑)
「まだイベント内容を理解できず、期待<不安」→赤と青半々くらい。

ろうきん森の学校のことはあまり知らないけど、運営側・参加者の中に知っている人は少しいて、交流会も楽しみだけど、イベント自体に目的があり、期待と不安が入り混じった状態、なんていう方が多いようでした。



もう少し参加者の方々の声を聞いてみたく、「今日の場に期待していること」答えるのが難しい方は「今の率直な気持ち」を紙に書いてもらいました。
「少し緊張している。自分の生き方について考えて、ヒントを得たい。」
「仲間を見つけたい！『だよー』って言い合えたら嬉しい！」
「ゲストだけでなく、参加者の方々のお話も聞いて、交流したい。」
「色々な方の話を聞いて、自然との関わり方、生き方を見直したい！」

「森」よりも、「生き方」というキーワードに惹かれて参加されている方が多い印象を受けました。また、「仲間」というキーワードが多く、「参加者の方と交流したい」という声も見られ、ゲストの話聞くだけでなく、同じような考え、悩みを持った人と話したい、繋がりたいという方が多いのかなと感じました。



井東敬子さんのお話。

運営側、参加者の方々と簡単に想いや気持ちを交換した後は、いよいよゲストのお話。トップバッターは、いきなり柔らかな山形弁でスタートして若干会場をざわつかせた井東敬子さん。鶴岡ナリワイプロジェクト・代表、わたしごとJAPAN・共同代表、リードクライム株式会社・取締役、株式会社めぐるん・プロジェクト契約スタッフという肩書を持ち、「子育て」「ナリワイ」「移住」「旅行会社」「地域づくり」「自然体験」をキーワードに、様々な活動を展開されています。今回は「小さな起業家を増やす」ことをミッションとした、鶴岡ナリワイプロジェクトの活動について、お話しいただきました。

「18歳で山形から上京、20代はJTBで営業担当として働き、32歳で富士山麓のホールアース自然学校へ来ました。今日のテーマ『森のそばでの暮らし』に関わる貴重な経験をここで積んだんです。」

「叩き込まれた3つのことが、『ないものは作る』『自分の可能性は自分で潰さない』『人の能力は変わらない（あなたの能力と私の能力は大して変わらないから、あなたにもできる）』ということ。そんな経験から、どこでも生きていけるだろうと思って、田舎で子育てがしたいなと思ったタイミングで、山形県鶴岡市に移住しました。当時43歳でした。」

森から木を伐りだしてウッドデッキを一から作ったり、自分のアイデアを具体的に企画に落とし込んだり、足元の花の名前一つを覚えることから始まる自然ガイドとして誰かを森に案内したり。文字通り「身をもって」、様々なことを経験する中で、上記3つの言葉が自分の頭と体に叩き込まれたと井東さんは言います。



「鶴岡ナリワイプロジェクトは、好きなことだけでなく、自分とか友達のちよつとした、ほんのちよつとした困りごとを掛け合わせて、月3万円くらいの利益を手元に残すような起業をしてみましょう、という講座。6年間やってきて、卒業生が約70名。全国ネットワーク『わたしごとJAPAN』も設立しました。」

「考え方のベースになっているのは、藤村靖之さん著『月3万円ビジネス』。なんとなく生きづらいこの社会で、会社を辞めた後の起業ハードルの高さに疑問を投げかけた本です。みんな『起業＝借金』みたいなイメージがあると思うんですけど、**ノーリスクで借金せずに起業することもできるんですよ。**」

「会社員として働けない＝社会にフィットできない」と、僕はなんとなく思っていました。組織を立ち上げるような大掛かりなものではなく、「自分の好きなこと×他人の困りごと＝小さなナリワイ」という発想、目からウロコでした。

信岡良亮さんのお話。

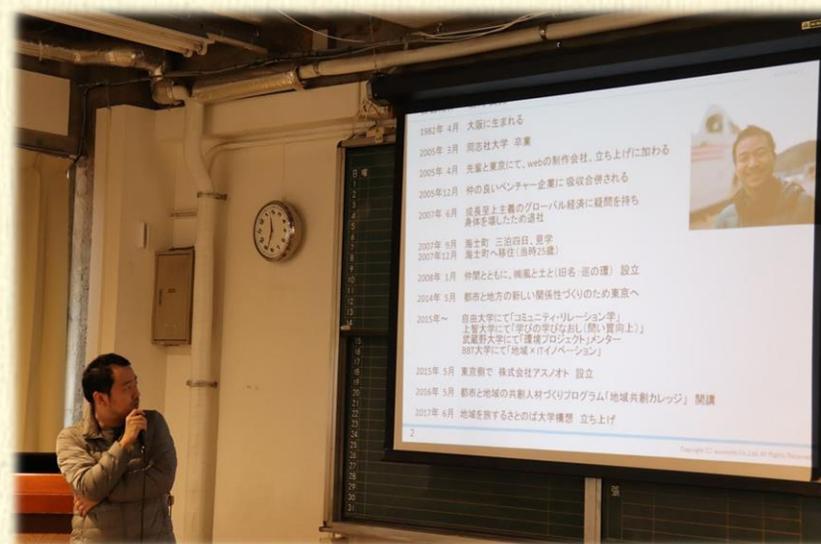
株式会社アスノオト・代表取締役、株式会社風と土・取締役、さとのば大学の発起人である信岡さんにバトンタッチ。

「さとのば大学っていう地域を旅する大学を作っているというのが、わかりやすい自己紹介。なんの仕事をしてるか聞かれると困るんですが、人口減少社会にどう対応するかをいつも考えていて、探求者みたいな感覚でいます。その施策として、働き方よりも学び方を変えないと生き方変わらないんじゃないかと思っています、学び方のバージョンアップをやりようと思っています。」

「大学卒業して、先輩とweb制作会社を立ち上げて働く中で、アル・ゴア著『不都合な真実』に出会ったんです。気候変動やばい、地球の資源をもう使い果たしてるよ、っていう本で。そういうのを勉強すると、もう人間は成長とかっていうお遊びをしている場合じゃなくて、持続可能性を考えないといけないんじゃないかと思って。でも会社に行くと『どうやって成長して上場するか』みたいな話をしてるんですよね。成長とか上場もいいけど、その先で地球がだめになるんだったら、これやっても仕方ないじゃんって思うようになって。仕事のメンバーは好きだったんですけど、その行く先の未来に共感できなくなったときに、ハードワークができなくなって、会社を辞めることにしました。」

「行く先の未来に共感できなくなった」

仕事にモヤモヤを感じている人は、実はこれにあたる人が多いんじゃないかなと思いました。仕事は刺激的で楽しい、同僚とも仲はいい、給料も悪くない。でも、なんだかモヤモヤ。目の前の環境には満足できても、目指す未来にズレがあると、一生懸命働けないよなああと、当たり前ながら改めて感じました。



「色々あって、海士町の隠岐の島っていう人口2,400人弱の島に移住することになって。途中で東日本大震災が起きて、日本の社会が変わるんじゃないかって期待したんですよ。でも実際は、すぐに社会が経済の方向に戻っていった。生き方って、あれだけのことで変わらないんだって思ったときに、**田舎で持続可能なモデルを1つ作っても、日本全体には影響を与えられないんじゃないか**と思って。」

「オセロの角1つを取れば勝てると思ってた勝負が、勝てそうにないなと思うようになって。もう1つの角を取りに行こうと。で、素敵な田舎のモデル作りにコミットすることから、都会と田舎の素敵な関係性を作ることに、事業領域をシフトしていくことにしたんです。**都会と田舎の両方から未来を共に作れる関係性を築く**ところに今取り組んでいます。」

信岡良亮さんのお話、続きます。

「都市側の仕事として、全国学生環境コンテストみたいなプレゼン大会の審査員をやったんですよ。色んな提案を見ると、だいたい都会よりも田舎の学生の提案の方が面白いんです。優勝したのは北九州の子で、自分たちが軽トラ運転して、農家から傷物の野菜をもらってきて、加工場でスイーツに変えて、20店舗くらいに卸しますっていう提案で。」

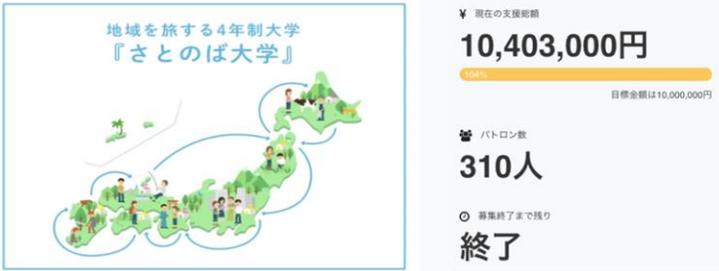
「でもこれって都会だと何もできないんですよね。まず、1つ目、都会だと軽トラ持ってる学生がいない（笑）。2つ目、農家の知り合いがいない。3つ目、加工所を借りようとお金がかかりすぎる。4つ目、衛生管理がきちんとしてるかわからないものを扱ってくれる店舗に出会えない。こんな感じで、都会の方が人はたくさんいるんですけど、このリソース使っていいよってくれる資源を持っているたちに会えないんですよ。」

「資源を持ってる人たちって、だいたい経済の論理で動いてるんで、お金ベースで物事を考えられるんだったら、この資源貸してあげますよっていう感覚。田舎だったら、『お前だったら畑貸してやるよ』とか、『うちの軽トラ使っていいよ』って言われるんですよ。そういう関係を見たときに、田舎の方が自分の足で物事作っていくの簡単だなんて思うようになって。**田舎だと人と人との関係性から物事が発展していくことをすごく経験しやすい**なって。都会で何か新しいことをチャレンジしようすると、お金を持っていないとチャレンジできないっていう感覚になりやすい。」

「でも最終的には社会の仕組みとか、ちょっと大きいこともしないといけなくなるんで、そういうときは都市が強いですよね。**最初の一步は田舎で歩みつ**つ、**社会と自分が接続した感覚を持って、もう一度都市側でそれを大きく**していく、みたいなことを体感できる方が面白いんじゃないかと思って。」

“地域を旅する大学”をつくりたい！！学校法人『さとのぼ大学』設立準備プロジェクト

Ryosuke Nobuoka まちづくり・地域活性化



地域を旅する4年制大学『さとのぼ大学』

現在の支援総額
10,403,000円

目標金額は10,000,000円

バックロンの数
310人

募集終了まで残り
終了

おめでとうございます

このプロジェクトは、2018-06-09に募集を開始し、310人の支援により10,403,000円の資金を集め、2018-08-27に募集を終了しました。

いいね! ツイート 埋め込み QRコード

地域を旅する4年制大学『さとのぼ大学』のクラウドファンディングページ

「で、僕は面白い地域を旅する大学みたいなのが作れたら、かなり色々なことができる人たちが育つんじゃないかと思って。さとのぼ大学を作るに至ったんです。1年ごとに未来を見ている地域を訪れて、4年間を経験する、そんな大学があってもいいんじゃないかと思って、作ってみました。」

田舎＝森のそばでの暮らしと、自分として生きることに繋がりを感じたのは、「自分の足で物事を作っていきやすい」という田舎の環境があったからかと、ハッとしました。**経済原理だけに基づいて人を、モノを、動かすのではなく、自分の信用や関係性に基づいて、色々なものを動かしていく。**信用とか関係性って、まさに自分のコアな部分から滲み出たり、作られたりするもので、**田舎、森のそばだと、そういうものを大切にせざるを得ないから、「自分として生きる」ことが自然とできるのかなと**感じました。

ゲスト2名のお話。

テーマに繋がるやりとりをいくつかピックアップしてご紹介します。

井東「自分として生きるってなんですかね？『自分として生きてるな』っていうバロメーターってなんかありますか？」

信岡「色々ありますよね。自分の仕事の何%がお金目的の仕事ですか？」

井東「難しい！仕事の額というよりも、嫌いな人と仕事をしないことにしてるので。フリーランスとしての楽しみは、嫌いな人の仕事を断れること（笑）。今は断りまくって、今月の仕事なんにもないけど！」

信岡「海士町は給料月15万円とかなんだけど、月5万円は貯められる。生きるハードルがすごく低いんですよ。」

井東「移住しちゃおうかなあ（笑）」

信岡「町のスローガンが『ないものはない』なんだけど、ないものを自分たちで作る過程で仲間がすごくできやすく、『自分として生きる』っていうのは、**個人として面白く生きるっていう意味と、同じ仲間と見る未来を面白がるっていう意味がある**とっていて。海士町は個人として生きる上で面白いかはわからないけど、町のコミュニティが描く未来はすごく面白いと思う。」

井東「鶴岡ナリワイプロジェクトは、好きなことや得意なことで困りごとを解決したいという想いを持つてる人を100人くらい作って、集えば、面白い社会ができるかなと思って、一生懸命今やってるところ。地域でやっていると、地域性とかもあるし、規模も大きいから、結構難しいかなっていう気はする。だけど、自分一人では面白いコミュニティは作れないし、「自分として生きる」って言うても、一人で行き詰まっちゃうから、**自分が面白く生きるっていうこととコミュニティはセット**なんじゃないかと思ってる。」



「自分として生きるってなんですかね？」という井東さんの率直な疑問は、運営側である私自身も何度も自問自答してきました。自分の中で出た答えは「自分に嘘をつかないこと」。でも、そこに他者は介在していなくて、お二人のトークセッションの中で「コミュニティ」というキーワードを聞くことができたのは、とても新鮮でした。「自分の好きなことに夢中になる」「自分の思いのままに行動できる」「自分の描く暮らしを実現できる」なんていうことも自分として生きることかもしれませんが、そこに仲間や友人、共に楽しんでくれる同士がいない風景を思い浮かべると、ちょっと寂しいなと個人的には感じます。

「自分として生きる」ことと、他者、もしくはコミュニティとの繋がりについての関係性を考えさせられる時間でした。

ゲスト2名のお話、続きます。

信岡「『自分として生きてるな』っていうバロメーター、他に何がありますか？」

井東「うーん。言いたいことが言えること。」

信岡「何によって言いたいことが言えるんですかね？」

井東「自分の自己肯定感+環境ですかね。私、この場では言いたいこと言えるけど、自治会では言いたいこと言えないんですよ（笑）でも、人間は変わってないんで、環境だと思うんです。」

信岡「なるほど。言いたいことを言えるかどうかを決めるときに、**選択肢を自分の内側に持っていること**ってすごく大事だと思っていて。僕の友人がパラレルキャリアなんですけど、この間台風あったじゃないですか。あのときに片方の勤め先が『出社してくれ』っていうのを断ったみたいで。断れた、つまり言いたいことが言えたのは、勤め先、つまり生活の依存先が複数あったからで。依存先が一つしかない、**選択肢は会社の意見一つのみ、自分の外側にあることになっちゃう**んですよ。一つの会社に依存する働き方って、そういう意味でも苦しくなってくると思うんですよ。**自分として生きやすい環境を整備するために、食い扶持を複数持つ**っていうのはありますよね。そうすると好きなことが言えるようになってくる。」

井東「そうね。そうすると、我慢もできるようになる。PTAとか自治会では言えないことがあるけど、他のコミュニティで言えるから、我慢できる（笑）でも、我慢しながら、ちょっとずつ変えていける。」

信岡「ちょっとずつ、ね。自分で作りたい変化って人それぞれあると思うんですけど、自分の暮らしを変えるって割と簡単で。でも職場の働き方を変えるのは結構大変で、街の在り方を変えるとなるとかなり大変。」



信岡「これを全部同じスピードで変化させようと思うとかなりしんどくて。だから、PTAとかのコミュニティはゆっくりめに、仕事はギア3速で、自分の価値観に関わる部分はギア5速で変えていく、みたいに、**変化のスピードをわきまえて取り組んでいけば、少しずつ変化は生み出せる**んじゃないかなと思いました。」

「選択肢を自分の内側に持つ」というワードが出てきましたが、つい相手のことや世間体、自身の安定性を気にして、選択肢の選び方が自分の外側に依存してしまうことがあります。大事なのは、環境整備。一つのものに依存するのではなく、一つ潰れてもまた別の依存先があれば、自分の中に一本軸を持って、「私はこう思う」と言えるようになります。そんな環境整備が基盤になって、小さな変化を生み出せるようになるんだと、学びました。

「ろうきん森の学校」小野敦さんのお話。

ゲスト2名のお話の後には、現在進行形で「森のそばでの暮らし」を実践する、森の学校スタッフのお話。まずは、「ろうきん森の学校」岐阜地区のグリーンウッドワーク協会代表、小野さんのお話です。電動工具ではなく、伝統的な手工具を使って、森から伐採したばかりの乾燥していない生木から、小物や家具をつくるものづくりを「グリーンウッドワーク」といいます。そんなものづくり技術・文化を広める小野さんの歴史をお話いただきました。

「1968年、濃尾平野生まれ、虫取りが大好きでした。小6でガンブラを知って、ものづくりに出会います。そのままヲタクまっしぐらで、中3で宮崎駿に目覚めて、環境問題というものを知りました。」



「その後は建築系の学校を卒業して、プラント建設の現場監督を務めます。主にゴミ焼却場の建設に携わって、大量消費社会の現場を文字通り目の当たりにし、残業、長期出張に疲弊していくようになりました。疲れたときは自然を求めて、休みが3日あれば北海道を旅することもよくありました。」

「38歳のとき、人生残り半分どう生きるかを考えるようになります。仕事は順調で、一級建築士の試験にも合格したタイミングで、『勉強って楽しいな。もっとできるんじゃないかな?』なんて思うようになりました。39歳、仕事を辞めて、森と木のスペシャリストを育てる森林文化アカデミーに入学します。」

「41歳で美濃に定住し、今に至ります。プラモデルから始まり、鉄骨に関わる仕事に就いて、木に目覚めました。時代を遡りながら、森の中で木を削ったり、スプーンを一日一本作ったり、虫とか山羊を育てたり。森のそばでの暮らしを実践しながら、森の学校でその価値とか手法を伝える仕事をしています。」

「ろうきん森の学校」松尾章史さんのお話。

続いて、「ろうきん森の学校」富士山地区のホールアース研究所に所属する松尾さんのお話。現在は自然ガイドを仕事の軸として、森林資源の新たな価値創出を目指した森林×テクノロジー事業や、企業・行政・学生向けの人材育成事業等にも携わっています。

「引っ込み思案で、周りの目を気にしすぎてしまう、お腹の弱い少年でした。でも、地元の裏山でクワガタを、川でハゼを追いかけたり、自然と戯れるときは別人で、時間も他人の都合も忘れて、暗くなるまで遊んじゃう、なんてこともありました。いわゆる原体験ですね。とはいえ、そんな『好き』を学問として学んだり、仕事にすることはなく、大学を出て、保険会社に就職します。」



「学生のときは周りに友人がいて、その中で自分があったんですが、勤め先が神戸になって、新天地で『周り』がなくなって、『自分らしさ』を自問する日々が続くようになりました。」

「ひたすらノートに日々思うこととか不満を書き込んだ結果、やっぱり自然で生きていこうと思って、仕事を辞めて、自然の専門家を養成する環境工科専門学校に入学します。」

「勉強とフィールドワークの日々。自然が好きだから、自然のことを伝えたいなんて思ってたんですが、先輩から『それじゃあ甘いよ』の一言をもらいました。『自然を伝える先に何があるか、どんな社会を作っていきたいかを考えないとね』って言われて。伝える先には人とか社会があるんだなってことに気づいて、自然だけじゃなくて、社会と接続しながら生きたいなって考えるようになりました。ホールアース研究所に就職することになった大きなきっかけの一つです。」

森の学校スタッフ2名のお話。

お二人のやりとりを少しご紹介します。

松尾「今森のそばでの暮らしを営んでいるかと思いますが、そういう暮らしが今の自分を形成するのにどんな影響を与えたかを教えてもらえますか？」

小野「グリーンウッドワークっていうのは生木加工のことで、山から木を伐りだして、そのまま柔らかいうちに加工するんですね。だから、山をよく見る必要があるんです。どんな木が生えていて、どの木は加工しやすく、どの木は堅いか、とか。そういうのを勉強するようになると、日常の暮らしでも自然のことを意識するようになります。ああ、これはあの木でできてるんだな、みたいに。**ものづくりをやることで、自分の日常の暮らしまで見つめるようになりましたね。」**

松尾「僕は、自然を伝えたい！と思って自然ガイドになって。でもやり方がわからないうちは伝える術を学んだり、方法を覚えるのに必死で。そのうち何が伝えたいか、自分のワクワクはどこにあったのかわかんなくなっちゃったことがあって（笑）。方法とかじゃなくて、まずは自分の『好き』を全力で伝えてみよと思って、子どもたちをガイドしてみたんです。そうしたら、すごく興味を持ってくれたり、楽しんでくれて。あと、自分が最初興味なかった子どもキャンプの運営の中で、子どもだけじゃなくて親御さんも喜んでくれる姿を見たりして。好きなこともそうじゃないことも、もっと好きになったり、好きに手繰り寄せたりしながら、外の世界と繋がっていくことがすごく面白いなあとと思っています。その手段というかカテゴリーが、**僕の場合はたまたま森とか自然だったのか**なって思います。」



まさに現在進行形で森のそばでの暮らしを営むお二人。「自分として生きる」を目的に、自然や森と関わったわけではなく、関わる中で「自分として生きる」ことが見えて、自分がそこにコミットしていることに気付いて、また自分の活動の意義を違った視点で感じられて。

ゲスト2名のお話と比べると、より自分の「好き」に忠実に実践を重ねることを繰り返してきたんだということがよくわかりました。4名それぞれの異なるアプローチからの「自分として生きる」ことのお話でした。

円卓ディスカッションの時間。

ゲスト2名、「ろうきん森の学校」スタッフ2名によるお話で、インプットたっぷりの時間を過ごした後は、アウトプットの時間です。

「よく聴きましょう」「短く話しましょう」「書き留めましょう」「思ったことを率直に」をルールに、運営側である「ろうきん森の学校」スタッフやゲストも円卓に加わり、6人程度を1組としてのディスカッションです。

「ちょうどいい距離感と輪」、「みんなの考えや想いの繋がりがわかる」、「円卓での話が見える」が特徴の、「えんたくん」をみんなの膝の上に置き、まずはペンを持たずに、自己紹介、みんながここに来た目的を話しながら、ディスカッションの時間がスタートしました。



話すテーマは、以下の3つ。

「前半パートで気になった言葉」(15分)

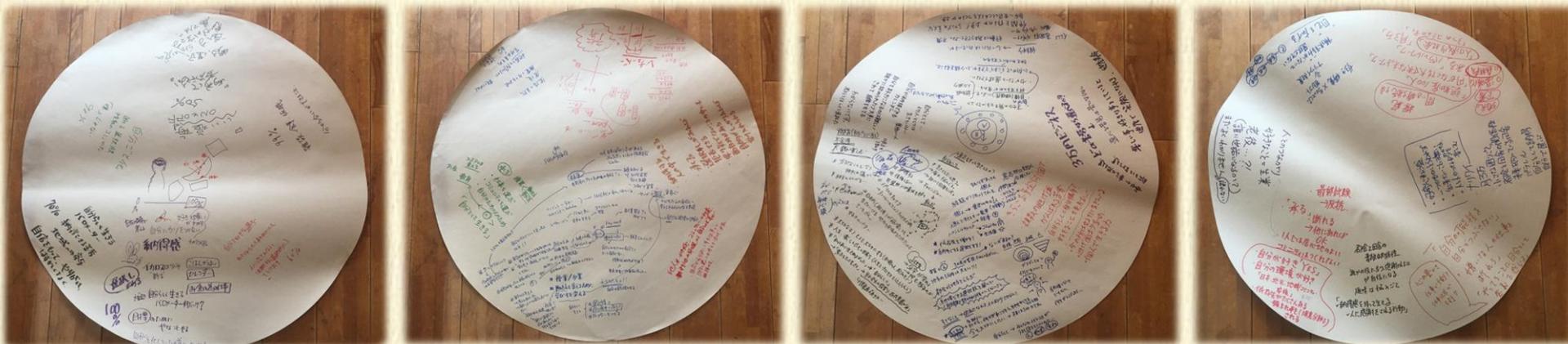
「『自分として生きる』って何だろう？」(20分)

「自分として生きてる？ そうでもない？」(20分)

それぞれ個人ワークの時間を設けて、テーマに沿って話し、記録係を中心に、話し合いの内容を書き留めてもらいました。

最初は少し固い空気の中スタートしたディスカッション、徐々に熱が入りだし、最後は時間を過ぎて言葉が飛び交い、大きな笑い声が聞こえるような場面も見られました。

円卓ディスカッションの記録。



円卓ディスカッションの共有。

熱いディスカッションの後は、みんなと共有の時間。各グループからディスカッションの内容をキーワードでまとめて、共有してもらいました。「自分として生きる」のテーマに対して出されたキーワードをいくつか紹介します。

「自分ごと化」

：仕事や時間の使い方を、一つ一つ自分ごと化して取り組む。

「“承る”ために自分の言葉で意味づける」

：山伏のように“承る”ために、自分の言葉で行動を意味づける。

「足る（満足）を知る」

：自分を満足させるのに何がどれだけ必要かを自分で把握しておく。



「群れて楽しむ！」

：個人の快樂ではなく、コミュニティの中で、みんなで面白いことに取り組む。

「脱20世紀」

：科学技術の進歩による幸福希求ではない、新しい幸せへのアプローチ。

各グループで様々なキーワードが出てきました。面白いと思ったのは、「自分として生きること」がテーマにも関わらず、「社会」や「コミュニティ」といった言葉がよく見られたことです。「自分として生きること」＝「自分の好きなことをやる」、だと思っていた私としては、そこに他人が介在するという発想が新鮮でした。社会やコミュニティと繋がるための媒体が自分の好きなことであり、それが「森」だった人が、たまたま森のそばでの暮らしを選んで、結果的に「自分として生きて」いるのかもしれない。

労働金庫連合会理事長からのコメント。

最後に、「ろうきん森の学校」を支援いただいている労働金庫連合会の中江理事長からコメントと挨拶をいただきました（以下、一部抜粋）。

本日はお足元の悪い中お集まりいただき、ありがとうございました。労働金庫連合会の支援する「ろうきん森の学校」は、新潟地区の「かみえちご山里ファン倶楽部」、福島地区の「いわきの森に親しむ会」、富士山地区の「ホールアース研究所」、岐阜地区の「グリーンウッドワーク協会」、広島地区の「ひろしま自然学校」の5つのNPOが事業主体となり、活動に取り組んでいます。「自分として生きること」というテーマでの今回の15周年記念イベントでしたが、私自身は働く中で、「自分として生きている」かどうかなんてことはもうわからな



くなるくらい、社会に染まりながら働いてきました。様々な働き方や生き方が選べる時代ですが、「ろうきん森の学校」の活動が、そんな新しい発見のヒントとなる一助になれば嬉しいなと考えております。本日はこのような場にお集まりいただき、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

時間の都合上、参加者の方々からのコメントや、質疑応答等のお時間はとることができませんでしたが、最後に2名のゲストにも簡単にコメントをいただき、イベントは幕を下ろしました。

森と里の恵みを使った交流会。

イベント終了後は、運営スタッフ、ゲストを含めた参加自由の交流会を開きました。今回は富士山麓で有機農業を行うホールアース農場の野菜と、ホールアース自然学校の営む野生鳥獣解体施設で捌かれたジビエを使ったケータリングフードを、フードデザイナーである植村遊希さんに振る舞っていただきました。鹿肉のロースト、紫大根とカブのジェノベーゼマリネ、鹿肉と里芋の中華風ちまき、カリフラワーと長ネギのプリン、食べる土のサラダ、など、ユニークかつとても美味しい食事を楽しませていただきました。

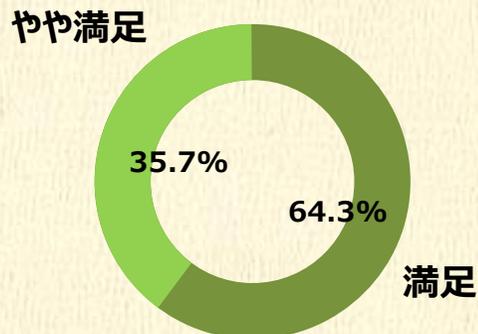
参加者の方々、ゲスト、運営スタッフが2時間ほど交流し、ろうきん森の学校15周年記念イベント「自分として生きることをみんなで考える会－森のそばでの暮らす中で見えてきた世界－」は終了となりました。



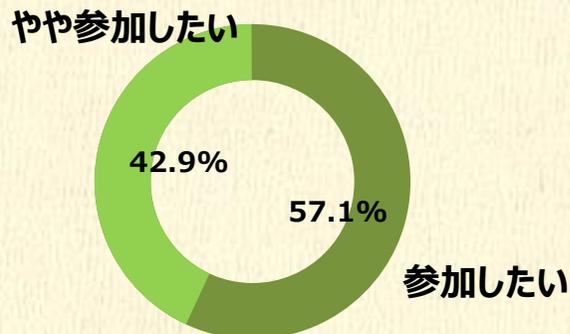
参加者の方々の声

※参加者41人中14人から回答

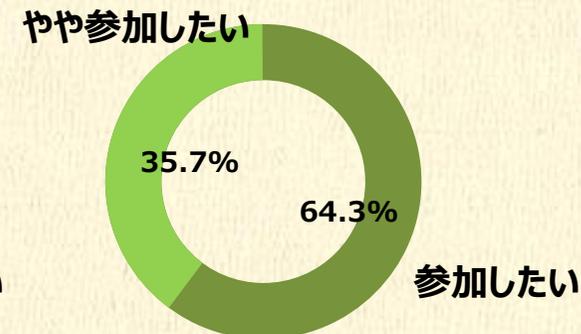
* イベントの満足度



* 同じ趣旨のイベントへの参加意欲



* ろうきん森の学校の活動への参加意欲



* コメント（一部抜粋）

- ・貴重な機会を設けてくださり、ありがとうございました。とてもいい時間が過ごせました。（40代女性）
- ・色々な価値観の方のお話を聞くことができ、大変刺激的でした。（20代女性）
- ・温かく受け入れてくださいました。セッションの際、運営の方も参加してくださり、司会などではなく、一人の人として参加してくださり、素の雰囲気も伝わってきたのがよかったです。自分の姿勢にも反映されました。（30代男性）
- ・良い出会いがありました。雰囲気も良く楽しかったです。未来につながる何かがありました。（40代女性）

おわりに

「自分として生きる」ってなんでしょう？好きなことをする。素直な姿勢を貫く。他人にも自分にも嘘をつかない。色々な考え方があるかと思います。

今回のイベントの中では「自分として生きなくてもいいんじゃない？」なんて声も聞こえてきました。価値観は人それぞれですが、人間が人間らしく暮らし、働き、生きるヒントが森の中にあるのではないかと、今回のイベントを通じて改めて感じました。

「自然体験」「アウトドアスポーツ」といった切り口だけでなく、「暮らし方」「働き方」「生き方」、色々な文脈で森に足を踏み入れる方が、今後増えてくれると嬉しいなと思います。

写真：花村育海（NPO法人ひろしま自然学校）
編集：NPO法人ホールアース研究所